

無縁社会

2009年3月19日の夜、群馬県渋川市にある静養老人施設「たまゆら」で火災が発生し、10人の方が亡くなった事件を覚えているだろうか？ 私は、亡くなった10人のうち7人は東京（墨田区6人・三鷹市1人）の出身と聞き、ショックを受けた。東京は住宅事情が貧困で、住み慣れた街で暮らしたいと願っても、生活困窮者で介護などのケアが必要な方にとっては適切な住まいが見つからず、地方の施設に移らなければならないケースが多々ある。

東京在住の私にとって、この問題は他人事とは思えなかった。火災事件直後、NPO法人「自立生活サポートセンター」もやい」の稲葉剛代表から、「『たまゆら』で亡くなられた方を弔いたいので、力を貸してほしい」という依頼が入った。

火災事件後「たまゆら」の理事長は逮捕され、火災事件はやがて貧困ビジネスとして大きくメディアで取り上げ

られた。しかし、亡くなった10人の方々については、メディアでは詳しくは取り上げられることはなかった。その遺骨は、いまだに親族の引き取り手が現れていないものも多い。私たちが現地では法要のため、故人の生前を偲ぶものを

がなくて、家族との縁も切れていた結果、無縁仏となってしまうと推測される。現在、「たまゆら」火災事件はずでに風化され、人々の記憶から忘れ去られようとしている。10人の死は、私たちに何を残したのだろうか？

援ネットワーク」を私たちは立ち上げた。あれから一年、葬送支援ネットワークの事務所には、引き取り手のない遺骨がたくさんある。私たちが「葬送支援ネットワーク」はお盆に法要を行い、定期的にお経をあげ、



「たまゆら」火災の犠牲者を悼む 四十九日法要（2009年5月6日）

多くの孤独死と関わる日々 家族や地域超えた「新しい縁」を

中下 大樹

葬送支援ネットワーク代表 真宗大谷派僧侶



探しても、写真も見つからない方も多く、近所の方が描いた似顔絵を祭壇に飾って対応した。

「たまゆら」事件をきっかけに、10人の方の死を無駄にしないため、私にできることは何だろうかと考えた。その結果、僧侶の私と志を同じくする葬儀社と共に、生活困窮者の葬送を支援する「葬送支

故人を弔う機会を作っている。無縁仏となった理由はさまざまであるが、最近多いのは「遺族が遺骨の引き取りを拒否するケース」である。

も、後継ぎとなる子どもがいなかったりした場合、いずれは無縁仏になる。困り果てた結果、どこか引き取って供養してくれる所はないかということになり、共同墓地を持つ私たち「葬送支援ネットワーク」にお呼びがかかる。

全国にお寺は7万数千カ寺あると言われている。しかし、なかなか無縁仏の遺骨を引き取って供養してくれる所はまだ多くはない。引き取り手のない遺骨をどうするのか？

これは宗教界全体の課題であるとともに、もはや社会全体で考えるべき課題であろう。また、少子高齢化・核家族化が進行する中で、子どもがいない家庭、後継ぎがいない家庭は、自分自身の孤独死の心配とともに、自らのお墓の心配もなくてはならないと言ふ二重の苦しみが出てくる。その苦しみに、私たちは耐えうるだけの「繋がり」を持っているだろうか？

現代は、自らの死を他人任せではなく、生きていううちからデザインしなければならぬ時代である。あなたが「家族に迷惑をかけたくない」と願い、ひとり死ぬことを選んでも、あなたが借家で孤独死してしまった場合、大家さんから親族、もしくは保証人に対して損害賠償請求を受ける時代である。物件を所有する大家さんにとって「事故物件」扱いとなり、資産価値が下がる。

死は誰にでも平等に訪れる。家族・地域・会社などとの従来の縁が築けない場合、それらに代わる「新しい縁」の構築が必要ではないかと私は痛感している。